

陰虚の病態と治療に関する基礎知識

大阪大谷大学薬学部 漢方医療薬学 教授 翁 忠人

図 1. 病理の虚実と病性(陰虚の虚熱証)

病理の虚証(正氣の不足)の病性と生薬

| | |
|---------------------|-------------------------|
| 氣虚証 寒証傾向 | →黃耆、朮、人参、甘草 |
| 陽虚証 寒証 | →附子、乾姜、桂皮 |
| 血虚証 寒熱夾雜証 (寒証傾向) | →芍藥、地黃、阿膠 →當帰、川芎、竜眼肉 |
| 陰虚証 寒熱夾雜証 (虚熱傾向) | →麦門冬、知母 →地黃、山茱萸 |

(日本漢方にはこの乾燥病態を示す言葉がない)

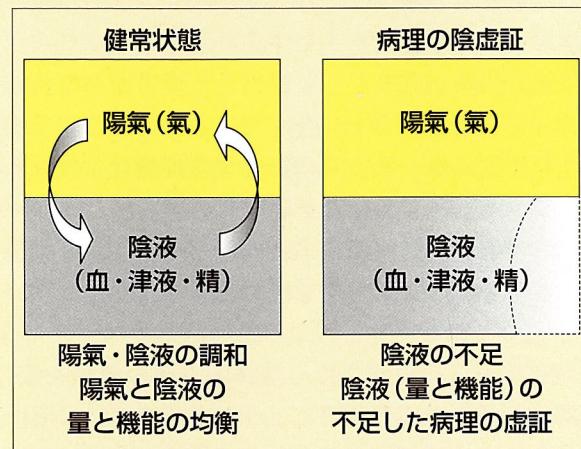
病理の実証(病理産物の停滞)の病性と生薬

| | |
|---------------------|-------------------------|
| 氣滞証 寒熱夾雜証 | →柴胡、大黃、枳実 →陳皮、厚朴、川芎 |
| 血瘀証 寒熱夾雜証 | →牡丹皮、大黃 →當帰、川芎、紅花 |
| 水滯証 寒熱夾雜証 (寒証傾向) | →木通、沢瀉、茵陳蒿 →朮、黃耆、附子 |
| 痰飲証 寒熱夾雜証 (寒証傾向) | →竹茹、桑白皮、前胡 →半夏、陳皮、杏仁 |

図 2. 中医学の「病理の陰虚証」と日本漢方の「陰虚証」

中医学の陰虚証は、陰液(血、津液、精)の量と機能の不足病態(虚熱証を伴う病理の虚証)。
日本漢方の陰虚証は、症候の陰証(寒証)を呈する体力の虚証患者(闘病反応が乏しい病態)。

中医学の生理と病理観



陰虚証(日本漢方と中医学の比較)

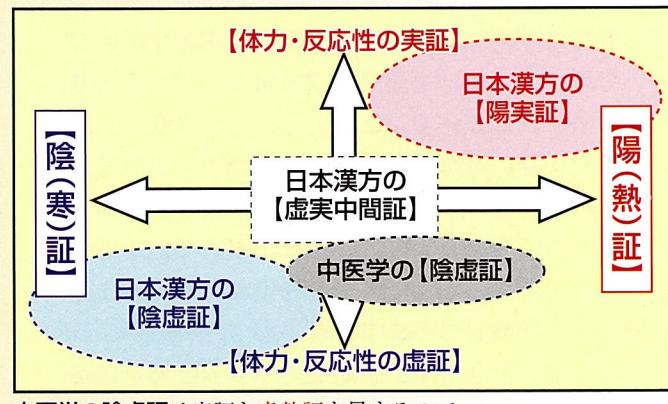


図 3. 中医学の五臓の陰虚証

中医学の基本概念 陰液(血・津液)は飲食物から脾で血が、脾胃で津液が生成される。
陰虚は五臓すべてに認められ、肝腎陰虚のように複合して診断される。

| | |
|---|-------|
| 肝(藏血を主る)の陰虚証(症状: かすみ目、めまい感、情緒不安定、筋肉の痙攣) | 杞菊地黄丸 |
| ↑【成因】脾虚による血の生成不足; 脾陰不足の波及 | |
| 心(血脉を主る)の陰虚証(症状: 不眠、虚煩、驚きやすい、心悸亢進、息切れ) | 清心蓮子飲 |
| ↑【成因】精神的ストレスや脾虚による血の生成不足の波及 | |
| 脾(統血を主る)の陰虚証(症状: 口乾、食欲不振、疲労感→氣血両虛) | 啓脾湯 |
| ↑【成因】下痢、熱病などによる陰液(津液)の不足(傷陰) | |
| 肺(通調水道)の陰虚証(症状: 少ない喀痰の乾燥咳、かすれ声、寝汗) | 麦門冬湯 |
| ↑【成因】燥熱などによる陰液(津液)の不足(傷陰); 脾陰虚の波及 | |
| 腎(藏精と水を主る)の陰虚証(症状: 遺精、膝腰の脱力感、手のひらの火照り感) | 六味丸 |
| ↑【成因】加齢・慢性疾患・不摂生(房事過多)・栄養不足による腎精の不足 | |

1. 病理の虚実と病性(図1)

病理と病性: 虚証は寒証傾向、**実証**は**熱証**傾向ですが、多くの病態は**寒熱夾雜証**です。そのため温熱性と**寒涼性**の生薬を組み合わせた処方で調整されます。

陰虚証の寒熱夾雜: 陰液(血と津液と精)の滋潤・栄養作用が不足し、陽氣が相対的に優位となって**虛熱証**を呈します。この点が寒証のみの日本漢方の陰虚証と異なる点です。

寒証を呈する病理: 中医学の陽虚証は寒証を呈し附子、乾姜、桂皮、細辛などの温熱性の補陽薬を用いる指示です。氣虚証も寒証傾向で温性の黃耆や朮を用いる指針となります。

Q: 中医学の「陽虚証」に用いる処方が日本漢方の「陰虚証」に用いる処方に対応するのですか？

A: そのとおりです。中医学の陽虚証は陽気(生命力)が虚衰した病態です。氣虚証の進展した病態に相当し疲労倦怠感と顕著な冷え(寒証)を伴います。この病態は日本漢方の陰虚証(陰証+虚証)に相当します。なお寒証を伴う中医学の氣虚証や血虚証も日本漢方の陰虚証に相当します。

2. 中医学と日本漢方の陰虚証(図2)

中医学の実証: 痘邪や体内に停滞した病理産物(瘀血や水滯)の過剰な病態です。この実証病態は日本漢方の実証(体力や闘病反応の強い病態)と異なる場合があります。

中医学の虚証: 正氣(氣と血と津液)の機能と量の不足病態です。この虚証は闘病力の低下病態であり日本漢方の虚証に類似します。

虚実夾雜証: 虚証と実証の病理が同時に認められる病態です。例えば六味丸の適応は陰虚と水滯の虚実夾雜病態です(滋陰という虚証を補う生薬と、利湿という実証を少なくする生薬が配合されています:図5参照)。

Q: 中医学の「虚実夾雜証」と日本漢方の「虚実中間証」の相違がわかりません。

A: 中医学の虚実夾雜は生氣(闘病力)の不足した強い虚証と病邪の多い実証の夾雜した病理だと考えています。日本漢方の虚実中間証は闘病力(腹力)や反応性の弱い虚証と強い実証の中間状態(図2の座標の中央部)を意味します。中医学は正氣の虚と病邪の実です。日本漢方は体力の虚と実です。主語が異なることを再確認してください。

3. 中医学の五臓の陰虚証(図3)

臓腑と陰虚証: 臓腑ごとに陰虚証があります。とくに血を貯蔵する肝と精を貯蔵する腎、水分代謝に関与する肺、飲食物から血を生成する脾胃、血脈を主る心の陰虚が弁証されます。

陰虚証と脾胃氣虛: 陰液不足の成因には脾胃氣虛が関係します。そのため地黄や**麦門冬**を含む補陰剤には十全大補湯、清暑益氣湯、麦門冬湯、清心蓮子飲のように人参や黄耆のような補氣薬も配剤されます。

Q: 中医学の臓腑ごとの病理が「煩雜」でよくわかりません。

A: 日本漢方では「腎虚」以外は臓腑の病理を論じることは少ないので、臓腑弁証に違和感を持つ人が多いようです。しかしながら抑肝散、清心蓮子飲、帰脾湯、清肺湯、牛車腎氣丸のように臓腑名に因んだ薬能を意味する処方を使っています。これらの処方の用法を理解するために中医学の臓腑弁証「も」紐解いてみることを薦めます。繁用される補中益氣湯は脾胃氣虛の病理觀が必須です。

日本漢方の病性

日本漢方では「**冷えのぼせ**」を桂枝茯苓丸や加味逍遙散の適応としていますが、寒熱夾雜という言葉は用いません。

日本漢方の血と水の不足

血の機能と量の不足病態(血虚)は中医学と同様の認識ですが、血と水(津液)が共に不足した病態(中医学の陰虚)に対応する言葉はありません。

日本漢方の陰虚証

陰証=寒証を呈する闘病反応が乏しい虚証の病態です。中医学の陽虚証や氣虚証に用いる桂枝加朮附湯や人參湯などの温補剤を用いる指示となります。

日本漢方の実証

闘病反応の強い病態を実証とします。なお、效能効果の前文では「比較的体力があり…」と表現されます。**熱証(陽証)**を伴うこの実証が**陽実証**と称されます。

日本漢方の虚証

闘病反応の弱い病態の意味です。なお、效能効果の前文では「体質虚弱の人の…」と表現されています。

日本漢方の病態と処分分類

縦軸に**虚実**、横軸に**寒熱(陰陽)**を目盛った座標軸で病態や処方を分類します。この座標では中医学の陰虚証は第3-4象限に位置します。

日本漢方の腎虚

日本漢方では加齢に伴う虚弱症状(気力や精力減退、足腰の脱力感、夜間頻尿など)を腎虚とみなします。この点は中医学と同様ですが、**虛熱証**を伴う腎陰虚と寒証の腎陽虚を明確に区別しません。

胃腸虚弱の腎虚

日本漢方では胃腸虚弱者に八味地黄丸を投与する時に人參湯を併用する場合があります。このような病態は人參を含む清心蓮子飲で代用できます。

図4. 補陰薬と処方の日本漢方分類

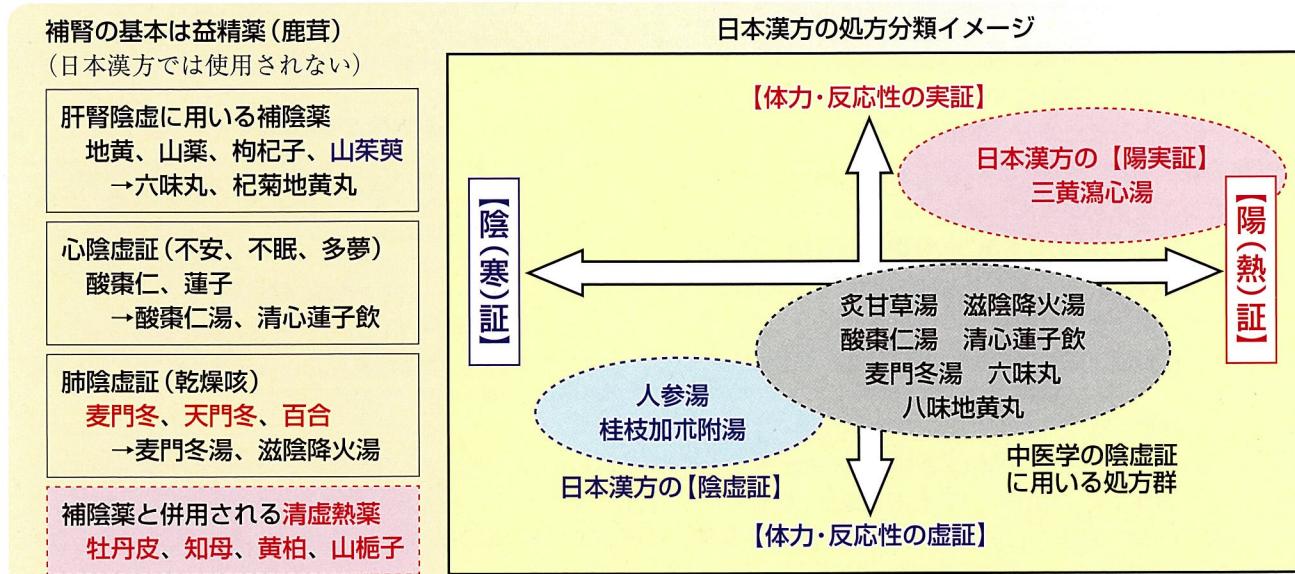
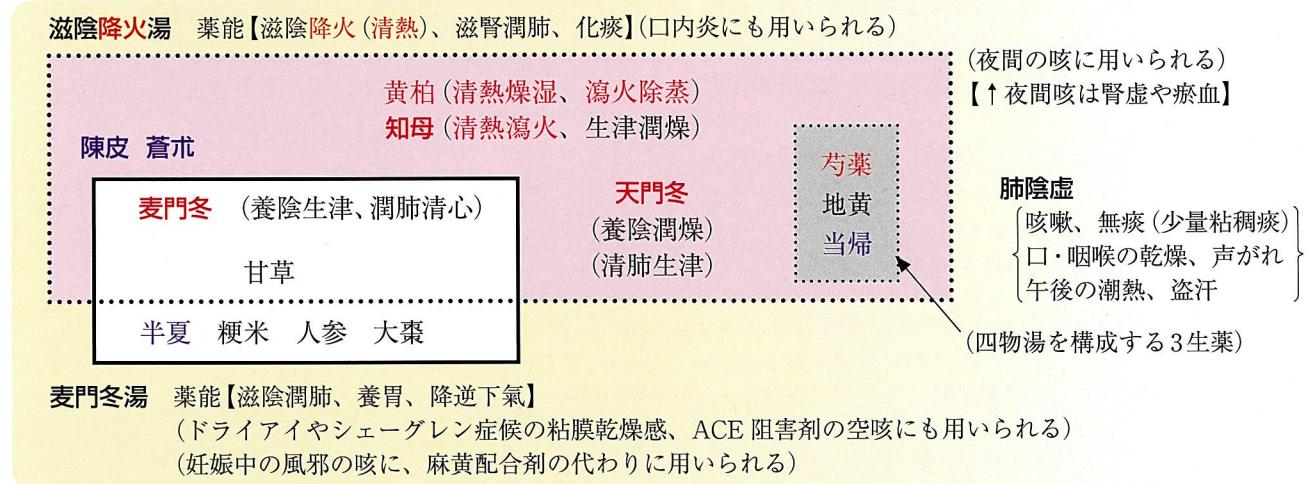


図5. 六味丸と八味地黄丸(腎陰虚と腎陽虚)



図6. 呼吸器系の陰虚証に用いる処方



4. 補陰薬と処方の日本漢方分類(図4)

補陰薬: 腎陰虚から肝陰虚、肺陰虚が誘発されます。脾陰虚は心陰虚と関係が深いと考えられています。地黄、山茱萸、枸杞子、胡麻が肝腎の補陰薬の基本ですが、**麦門冬**(心肺胃)、山茱(脾肺)、酸棗仁(心肝)、蓮子(脾腎心)なども臓腑毎の陰虚に用いられます。

補陰薬の慎重投与: 補陰薬は補血薬と同様に胃腸虚弱者には食欲不振を起こすことがあります(とくに寒証や水滯証を呈する脾胃氣虛証には茯苓、朮、黃耆などの補氣・利水薬および山楂子などの消食薬の配合が必要です)。

生脈散(人参、麦門冬、五味子): 脾胃と肺の氣陰両虚による乾燥咳、動悸、息切れ、疲労感に用いる基本処方です。夏ばてに用いる清暑益気湯に含まれています。

5. 六味丸と八味地黄丸(図5)

六味丸の構成: 肝腎陰虚(腰下肢の脱力感)に対する滋陰の3生薬(地黄、山茱萸、山茱)と夜間の口渴と排尿異常に対する清虚熱と利湿の3生薬(牡丹皮、沢瀉、茯苓)が配剤されています(虚実夾雜病態への配慮)。

六味丸の関連処方: 六味丸に補陽薬(桂皮と附子)を加味した八味地黄丸; 清虚熱薬(知母・黄柏)を加味した知柏地黄丸; かすみ目に用いる枸杞子と菊花を加味した杞菊地黄丸; 乾咳に用いる麦門冬と五味子を配合した麦味地黄丸などがあります。

日本漢方の処方分類(図4)

中医学の陰虚を調整する処方は、日本漢方の体力弁証では同じ虚証傾向ですからX軸より下方に分類されます。一方、虚熱証を呈するのでY軸のやや右側に分類されます。

日本漢方の六味丸

効能効果の前文にある「①疲れやすく尿量減少または多尿で、②時に口渴があるもの」という投与前提(しばり)の①は腎虚、②は虚熱証を例示しています。

清暑益気湯

日本では暑気あたり(夏ばて)、下痢、疲労倦怠に用いられます。発汗後の脱水症状を補陰剤の生脈散で調整し、熱感を黄柏で軽減し、胃腸機能の低下を補氣剤の補中益気湯で改善する処方内容です。

六味丸と八味地黄丸

日本では六味丸は子供の発育不良や夜尿症に、補陽薬の附子と桂皮を含む八味地黄丸は高齢者の夜間頻尿などの寒証の虚弱症状に用いられてきました。

日本漢方の八味地黄丸

効能効果の前文にある「①疲れやすく、四肢が冷えやすく、尿量減少または多尿で、②時に口渴があるもの」という投与前提の①は腎虚(下線部は腎陽虚の寒証)、②は虚熱証を例示しています。高齢者の四肢の冷え症やしづれ感、糖尿病性神経症のしづれ感に用います。

【寒証傾向の腎陽虚と虚熱証の腎陰虚の病理論によって八味地黄丸と六味丸の適用を考えます】

Q: 乾地黄と熟地黄の区別がはつきりわかりません?

A: 日本では乾地黄に相当する局方ジオウが用いられます。中藥学では**乾地黄**(乾燥した根:甘、寒:清熱涼血、養陰、生津)とこれを黄酒で蒸した熟地黄(甘、微温:滋陰補血、益精填髓)を使い分けています。これによれば虚熱証に用いる六味丸には乾地黄が、虚寒証に用いる八味地黄丸には熟地黄が適するように考えられます(いずれも原典の指示と異なります)。

6. 呼吸器系の陰虚証(図6)

麦門冬湯: 体液不足(陰虚)を**麦門冬**、人参、大棗、甘草、梗米の滋陰潤肺作用で改善する処方です。半夏の降逆(止咳)も重要です。腰や膝の脱力感を伴う場合は六味丸を兼用します。

滋陰降火湯: 処方名は陰虚を滋養し陰虚に伴う虚火を除去する薬能を意味しています。**麦門冬**と同類の**天門冬**を配合し、**黄柏**、**知母**という清熱薬を加味して麦門冬湯より**熱証**(焦躁感、不眠、口内炎)にも適する処方です。六味丸を兼用することがあります。

麦門冬湯

日本漢方では主として皮膚が枯燥した高齢者の風邪のこじれた咳や気管支炎に用いられます(顔面を赤くして咳き込む状態に用いるのが口訣です)。咽の違和感は半夏厚朴湯より奥深い(下部)にあります。

麦門冬湯の関連処方

同様の病態で胃腸虚弱傾向であれば参蘇飲が適します。こじれた風邪のあとの長引く咳には柴朴湯、咳き込んで脇腹が痛む時には柴陷湯、夜間の乾燥咳が顕著であれば滋陰降火湯が適します。

こじれた咳嗽に用いる処方
(炎症を指標にした使い分け)

半夏厚朴湯 → 麦門冬湯 → 柴朴湯 → 柴陷湯 → 清肺湯 → (炎症性)
(参蘇飲) (滋陰降火湯)